

りも寧ろ秋月の他の作品に近きものあり、且、秋月の傳はなほ不明の點多く、其の入明を雪舟と同時とする説も他に確證なきを以て、或は秋月は明應二年入明、同五年夏歸朝せる遣明使壽黨の一行に従行せるに非ずやと推察し、此の圖は即ち歸朝直前北京の外客接待の施設たる會同館に於て揮毫せるなるべしと推定するのである。旁ら此の秋月の明應年間入明推定説を立證する如く思はれるのは紀州徳川家に藏せらるる「白筆寫壽像附與等觀藏主四明天童第一座雪舟七十一歳書之」の款識ある雪舟自畫像に加へられたる明人青霞の贊である。即ち「說破空花。本無色相。不現色相。以何供養。傳百千年。一日想像。嗟乎。此即師之凝思於河漢之時。援毫於雪蕉之際。這般模樣。若夫所蘊蓄者。自在有情盡無上者也。弘治丙辰歲再季春念八日。天府第一名儒士秀才青霞沐手贊」とあるが、或は秋月は延徳二年時に歳七十一の雪舟より其の壽像を與へられ、明應年間入明の時之を携行し、歸朝直前、青霞の贊を請受けたものかとも想像されるのである。(青霞の傳は詳ではない。慶長二年に月舟の「送瑞龍山文成族島公居士赴大明國」なる詩に和したものが見えてゐる。即ち「大明青霞寫文成和予前篇云。曲卷節齊夏日過。筆間談靜似懸河。羅臣萬里辭朝去。思似東流不盡波。天子弘治丙辰六月望後。青霞和什」とある。曲卷節齊夏日過。筆間談靜似懸河。羅臣萬里辭朝去。思似東流不盡波。天子弘治丙辰六月望後。青霞和什」とある。以上、單なる推測を出でず、確たる明證は無いのであるが、本圖を以て秋月の筆に擬するは、兎も角興味ある説とすべきである。

### 三四 大雅筆山水人物圖襖

和歌山 遍照光院 藏

紙本著色  
 各 一六七八寸(五尺五寸四分)  
 山亭人物圖各横 九一七寸(三尺三分)  
 渡橋人物圖 中央二面横 七四寸(二尺四寸四分)  
 兩側二面横 五四五寸(一尺八寸)  
 松樹圖各横 九一七寸(三尺三分)

高野山遍照光院に藏する大雅筆山水人物圖襖繪十面は、從來其の傑作の一として世に著聞するものである。即ち此の十面の繪は、山亭人物圖の四面、渡橋人物圖の四面、松樹圖の二面の三組の襖より成るが、寺傳に依れば、これはもと同院書院二十五疊の廣間を裝飾せるものにて、其の廣間東側北詰に山亭人物圖、西側南詰に渡橋人物圖の襖が筋違に相對して建てられ、また松樹圖は山亭人物圖と直角に北側東詰に續き、其に並ぶ床に同筆の壁張付があつたと云ふ。今假に此の所

傳を肯定して圖を見るに、其の著想頗る巧妙非凡なるものあるを覺える。即ち山亭圖は疊々たる巖石の間、松樹椿樹其他雜木に圍繞せられたる一字、紗帷を高く擧げたる窓間に、三人の老者熙然として遠望するあり、また別の一字に若者が茶を煮つゝあるを現し、すべて幽靜なる山居の景を寫す。而して之に對する渡橋人物圖は遠山を望む橋上に二老者と一侍者の進み來るを描くが、此の二組の襖を相對せしむる時は、恰も山亭中の人物が橋上の人物と相呼應するが如き構圖となるのである。次に松樹圖は、山亭の窓下、松樹を隔てて廣漠たる遠山の景を俯瞰する如き構成となり、以て一層畫趣を深からしめるものがある。圖は、すべて紙本著色なるも、就中山亭人物圖最も色彩の使用著しく、巖石は泥金にて拘り、其の面淡藍、淡朱を施し、巖頭時に淡草綠を用ひ、濃墨の占苔には更に石綠を點す。介字、大胡椒點の類は淡草綠、第三面前方の夾葉二種また泥金にて拘り、椿葉は濃墨、其の樹幹また拘金、茶寮前の圓き夾葉は淡朱、第一面第三面の遠樹は其幹淡赭、點葉は淡藍、山亭また拘金、軒は淡朱、紗帷は淡藍、人物の肉身は淡赭、衣服は泥金を淡く塗り、又泥金線にて拘る。一老者の手にせる團扇の横骨は淡き金描、其の柄は朱、涼爐中の涼爐、急燒の類も拘金である。以上相當に色彩を用ひ、泥金の使用頻繁であるが、全體の印象は寧ろ淡彩の如く瀟洒なものがある。次に渡橋人物圖に於ては、老人の頭巾、侍者の腰紐、樹蔭の隈取り等に草綠、樹幹は處々に焦墨と淡赭を用ひ、三角の夾葉は朱、遠山と橋梁は淡墨を刷毛にて刷いてあるが、橋梁にはまた拘金が施してある。次に松樹圖は、樹幹、葉、岩の點描は大體淡墨仕立にて骨に焦墨を入れ、松葉の淡墨に淡藍を加へ、また樹幹の下部に淡赭、其の周邊と遠山の山劈には泥金線を入れてある。

本圖は大雅の作品としては頗る謹密なる筆にて非常の力作と云ふべく、しかも超俗の氣畫面に横溢して、天才の雅懷悠然たるものあるを覺えしめられる。而して本圖の製作年次に關しては、本圖に款識を缺き、また文獻の明證あるもの無きを以て、遽に之を確定し難いのであるが、寺傳の一に依れば、遍照光院は慶長六年回祿、其の後の建築粗陋なりしを以て、寶曆三年春起工、六年を経て寶曆十一年竣工せりと傳へるを以て、此の時の製作とすれば大雅三十九歳の筆と云ふこと

になる。然るに近時、寺傳の「遍照光院系普」に依り、丁卯の歲即ち延享四年改築起工、六年を経て寶曆二年竣工せりとの記事を援き、大雅三十歳の筆とする説が出たのであるが、其の當否に就いてはなほ考うべき

に依り、大雅は榮泉院の紹介に依り、遍照光院襖繪を描くに到つたもの、如く考へられてゐるが、文中「蒙命候補障」とあるのが即ち本圖であるとすれば、やゝ速断に過ぎる嫌があるであらう。また近世逸人畫史

點がある。即ち本圖山亭人物圖中茶寮内に急燒が描かれてあるが、葦葭堂雜錄に依れば、大雅が高芙蓉より急燒なるものあるを教へられ、大に喜んで其の圖を上木し、知人の間に配布せるは丙子の歲、即ち寶曆六年、大雅三十四歳の時なるを以て、此の記事にして信を措くべくんば、本圖は少くも寶曆四年以後の製作に屬すると考へなければならぬのである。作風より之を觀るも、恐らく三十歳説よりは寧ろ不惑前後の製作とする説を妥當なりとすべきであらうか。なほ本圖中、渡橋人物圖は各約一八厘前後の補紙あり、他の二組より畫面の豎の法量短きに依り、又寺傳の如く此の三組の襖がもと書院に在りしとすれば其の配置採光上都合なりとも考へられるので、近時之を以て書院の襖ではなく、其れに隣接せる部屋に使用されたるものにて、渡橋人物圖は一段高くなれる書院上段の恰度裏側の四面に相當し、山亭人物圖は之に相對する側に在り、松樹圖は之と直角に建付けられてゐたのであらうとの推應説があるが、此の説あるひは是なるに近からうか。なほ遍照光院には別に大雅の尺牘一通を藏するが、其の文に「暑氣之節、先以御安體被成御座、恭喜奉賀候、蒙命候補障、即寫出奉之候、御丁寧之潤筆金御惠投被下、忝仕合拜受申上候、遍照光院諸尊者御接對之砌、乍惶宜御傳達被成下候様奉願候、春來不快、此間全快に及、因尊答延引仕候、草々頓首、五月廿八日、無名拜、榮泉尊者玉榻下」とあり、從來此の書翰

大雅書簡に、大雅が清淨光院襖繪を描いたとの説話を載せてゐるが、其の説話の内容より察して、之は遍照光院を清淨光院と誤りしことに論無く、また本圖の揮毫につき種々興味ある寺傳の類もあるが、すべて是等の逸話類は史實として信を措き難きを以て、此處には言及するに及ばない。

## 五二 菩薩像

東京 長尾欽彌氏藏

高二九・一厘(九寸六分三厘)

半跏思惟相の小銅佛にして、全部一鑄に成るものとおぼしく、内部は腰衣の下部邊まで空洞で形容の割に非常に重い。膚の諸所に纏かながら剝離形態を示すのみで火中の形跡もなく保存良く、全體黒色に光り數箇所鍍金の跡と思はれる處を見る。

像容は頭部大きく、體はさまで屈せず胸部より腹部にかけて通例見る如き引締りもなく、手の置き方も極く自然的な素朴な姿であり、耳及足の扁平長大なるは特に目立つ。慈容は微笑もなく簡朴な表現ながら溫容あり、頭飾は殊に大きく白色の寶石が嵌入されて居り、正面に二個、右側の一つ見られる。その他細部の

飾装としては簡単な環釧あるばかりで胸飾等もなく、又白鳳期に盛行した聯珠模様もない。腰衣の二段に區切られ整齊されて居るのも珍らしき例であらう。臺座

和歌山遍照光院藏